

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13965

研究課題名（和文）性的マイノリティ被災者の脆弱性・レジリエンスと防災政策の可能性についての一考察

研究課題名（英文）Vulnerabilities, Resilience and Potential of Inclusive Disaster Risk Reduction and Management Politics from Sexual Minority Survivors' Perspectives

研究代表者

山下 梓（YAMASHITA, Azusa）

弘前大学・男女共同参画推進室・助教

研究者番号：60762094

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 500,000円

研究成果の概要（和文）：性的マイノリティの人たちの災害時の経験については、国内外において研究の必要性が指摘されてきた。本課題では、熊本地震（2016）、平成28年北海道・東北豪雨（2016）、北海道胆振東部地震（2018）を経験した10名の性的マイノリティの人たちへのインタビュー調査を通じて、性的マイノリティの人たちが、実際に、災害のどの段階でどのような困難を経験したのかを明らかにした。また、脆弱性だけでなく、周囲の人や地域などどのようにかわり、災害に対応したかという、レジリエンス（回復＝復元力）にも着目してその経験を記録・考察した。この結果は、脆弱性や多様性の観点からの防災政策の展開も踏まえて論文等にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

性的マイノリティの人たちが、災害のどの時点でどのような困難に直面したのかを明らかにすることができた。特に、一般的には性的マイノリティの人たちの災害時の困難として、避難所での男女別施設や性別に関わる物資の受け渡しの場面がイメージされがちだが、本研究では、パートナーが同性であることやジェンダー表現への無理解へのおそれ、避難した場合の避難所運営者や他の避難者との衝突を避けようとして、避難所へ行くことができない（避難所にたどり着く前の段階にも困難がある）ことが明らかになった。以上のことは、避難所での包括的な支援のあり方のみならず、誰一人取り残さない避難のあり方を検討するうえで示唆を与えるものである。

研究成果の概要（英文）：There's been a need for research on how people of gender and sexual minorities experience disaster both nationally and internationally. In this research, I interviewed ten people of gender and sexual minorities who experienced Kumamoto Earthquakes (2016), Flood in Hokkaido and Tohoku (2016) and Hokkaido Iburi Tobu Earthquake (2018). Through this qualitative study, I documented what their struggles were and at what point of disaster it was experienced. This research also considered how they interacted with people around them and communities from a resilience perspective. Findings were published in papers in which I also analysed development of Japan's disaster policies from vulnerability and diversity perspectives.

研究分野：災害研究

キーワード：性的マイノリティ LGBTQ+ 災害 防災 脆弱性 要配慮 レジリエンス

1. 研究開始当初の背景

性的マイノリティの人たちの災害時の経験(性的指向,ジェンダーアイデンティティ,ジェンダー表現を理由とした無理解や偏見等による困難な経験等)については,国内外において調査研究が増えつつあるもののまだ限られており,学術的研究の必要性が指摘されてきた。日本では,東日本大震災において初めて,性的マイノリティの人たちの災害時の困難が明らかになり始め,関心が寄せられるようになったといわれている。

本研究の代表者は,東日本大震災において,女性の悩み・暴力相談事業や性的マイノリティ相談事業に関わった。この経験を通じて,災害地で性的マイノリティ被災者に特有の困難がありながら,その存在と課題が不可視化されている状況を目の当たりにした。東日本大震災からの復興支援の過程でアメリカ同時多発テロやハリケーンカトリーナ,ハイチ地震で調査研究や支援を行った専門家らと情報・意見を交換する機会があり,不可視化を含む災害時の性的マイノリティ被災者特有の困難が国を越えたものであると同時に,この分野における研究の蓄積がわが国にはなく,国際的にも非常に限られていることを知った。このため,東日本大震災だけでなく,その後国内で起きた災害での経験についても記録・発信し,災害と性的マイノリティに関する研究の深化に寄与したいと思ったことが本研究の動機である。

東日本大震災の後も全国各地で大規模災害が続いたが,それらの災害で性的マイノリティの人たちがどのような経験をしたかについて研究は見当たらず,また,東日本大震災での性的マイノリティ被災者らの経験が,性的マイノリティの人をも射程に入れた防災政策のあり方や防災の取組につながったのかどうかについては,未だ検証されていなかった。

2. 研究の目的

上記を背景・動機として,本研究はまず,東日本大震災後に起きた国内の3つの災害について,性的マイノリティの人たちの困難を明らかにすることを第一の目的とした。また,人の多様性や脆弱性,要配慮といった概念に着目し,日本における防災政策がどのように展開してきたかを明らかにし,性的マイノリティの人たちの災害時脆弱性や支援ニーズに対して,どの程度対応できているのか(あるいはいないのか)を考察した。併せて,紛争や災害等の際の人道支援において国際的に活用されている「人道憲章と人道対応に関する最低基準(スフィア基準)」についても,性的マイノリティの人たちの脆弱性や支援ニーズの観点から記載の変遷を検証した。以上のことにより,国内外の防災政策学分野や人道政策学分野の深化に貢献することをめざした。

3. 研究の方法

災害を経験した性的マイノリティの人たちの協力を得て,北海道,岩手県,熊本県において,インタビュー調査を行った。この調査は,半構造化インタビューの手法を用いて実施した。インタビュー後は,回答者の了解を得て録音されたインタビューを文字起こしし,文字起こしされたテキストからポイントとなるテーマを抽出(コーディング)し,分析した。

また,先行研究や災害対策基本法や防災計画などの文書から,性的マイノリティの人たちにかかわる脆弱性,要配慮などのとらえられ方や位置づけがどのように発展してきたのかを検証した。インタビュー調査結果と政策分析結果を照らし合わせ,防災政策が,性的マイノリティの人たちの災害時の困難や支援ニーズに対してどの程度・どのように対応できているのか(あるいはできていないのか)を考察した。

4. 研究成果

熊本地震,平成28年北海道・東北豪雨,北海道胆振東部地震を経験した10名の性的マイノリティの人たちへの半構造化インタビュー調査を通じて,性的マイノリティの人たちが,実際に,災害のどの段階でどのような困難を経験したのかを明らかにした。分析の結果,具体的には,避難場所や避難所における避難者名簿のあり方(氏名欄,性別欄),世帯を基本単位としてスペースが割り振られる避難所でのプライバシー,男女別のトイレ・入浴施設,応急仮設住宅や災害公営住宅の入居要件としての世帯要件,ふだん服用している薬等の入手・確保,他の避難者とのやりとり(孤立や排除)において,性的マイノリティの人に特有といえる困難があった。また,性的指向,ジェンダーアイデンティティ,ジェンダー表現だけでなく,他のあり方(本研究では,障害)との交差によって,災害時の経験がより複雑化することも示唆された。

一般的には性的マイノリティの人たちの災害時の困難として,避難所での男女別施設や性別に関わる物資の受け渡しの場面がイメージされがちだが,本研究では,パートナーが同性であることやジェンダー表現への無理解へのおそれ,避難した場合の避難所運営者や他の避難者との衝突を避けようとして,避難所へ行くことができない避難所にたどり着く前の段階にも困難があることが明らかになった。

困難経験と同時に,周囲の人や地域などどのようにかわり,災害に対応したかという,レジリエンス(回復=復元力)にも着目してその経験を記録・考察した。レジリエンスの例として,性的マイノリティ被災者が,避難所において避難所運営の役割を自らすすんで引き受けて他の

避難者を支援したり、性的マイノリティ被災者が他の性的マイノリティ被災者をサポートしたり、レスビアンバーやゲイバーが炊き出しを行い地域の性的マイノリティの人たちや女性、親子連れなどを支援したことが挙げられる。

日本の防災政策については、国レベルで見ると、東日本大震災以降、男女共同参画政策の分野で策定された指針において、性的マイノリティ被災者に配慮した避難者名簿の性別欄のあり方やトイレのあり方について記載された。しかし、同指針や防災基本計画のテキスト分析の結果、それ以上のめだつた進展はみられなかった。一方で、本研究期間中に代表者が協力し実施されたメディアの調査から、実施自治体の防災基本計画や避難所マニュアル等においては、性的マイノリティ被災者を想定した記載が増加傾向にあることが明らかになった。スフィア原則においても、被災者への支援提供時の無差別原則に性的指向を含んでいた従来の記載から、防災の計画・実施段階における性的マイノリティの人たちの関与や具体の支援提供のあり方に関する記載へと拡充されたことが確認された。以上のことは、論文（刊行予定のものも含む）や学会において発表した。

本研究の次の段階として、今回カバーしなかった災害における性的マイノリティの人たちの協力を得て実施する聞き取り調査や、性的マイノリティの人たちの災害時の支援ニーズに関する量的調査、さらに、自治体による避難所運営マニュアルや福祉避難所運営マニュアルを性的マイノリティと他のアイデンティティの交差の視点から分析すること等を内容とする研究課題へと発展させる予定である（本研究期間終了の翌年度、科研費基盤(C)に採択された）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山下 梓	4. 巻 708
2. 論文標題 防災に性的マイノリティの人たちの視点を	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近代消防	6. 最初と最後の頁 84-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下梓	4. 巻 21
2. 論文標題 見えない存在から人道支援のスタンダードへ 災害と性的マイノリティ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 91-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下 梓	4. 巻 3
2. 論文標題 災害とジェンダー・セクシュアリティ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 クィアスタディーズをひらく 健康/病, 障害, 身体	6. 最初と最後の頁 102-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下 梓	4. 巻 53(4)
2. 論文標題 避難所での性的マイノリティの人々を取り巻く課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地域保健	6. 最初と最後の頁 50-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山下梓
2. 発表標題 性的マイノリティの人びとの視座から
3. 学会等名 日本災害復興学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------